

尾藤正英抄訳、荻生徂徠著「政談」講談社学術文庫、講談社、2013 年 1 月 10 日刊を読む

昔の大工と今の大工、飛驒の大工

1. (1) 昔の大工は、家に秘伝の巻物をもち伝えて、技術を代々伝承したが、今の大工は暮しに追われて、少しでも多く仕事を引き受けようとするから、仕事がだんだん下手になって、建てた家も早く駄目になる。
 - (2) 器物を作るのも同様である。私の家に、父方の曾祖母が伊勢の国でこしらえさせた朱塗りの椀や膳など一式の食器がある。
 - (3) 祖父から父に伝え、父から伝わって、今でもあるが、百年以上経っても朱色も変わることがなく、疵もつかず、きわめて頑丈である。
 - (4) 私が田舎で、百姓が重箱などを作るのを見たときにも、^{ぬし}塗師がなかなか来てくれなくて不自由である。
 - (5) 一人の^{かずさ}塗師が上総の国中を方々雇われ歩いて、仕事をするのである。
 - (6) 一カ所に二十日も三十日もいて、塗る仕事をし、また別のところへ行って仕事をする。
 - (7) はじめにやりかけておいた塗物の乾いたところを見はからって、もう一度来てその上に^{まきえ}蒔絵をする。
 - (8) その漆も別に買いととのえておいたのを塗らせ、下地もあらかじめ作ってあるから、何もかも希望したとおりに作り上げて、頑丈である。
 - (9) また、ある旗本の家に、三河に住んでいたころ、娘の嫁入り支度のため、その娘が四、五歳のときから心がけて、毎年一品か二品ずつこしらえておいた諸道具が、私の幼少のころまでは残っていたのを見たことがある。
 - (10) どれも自分の家で作ったものであるから、頑丈なことはたとえようもない。
2. (1) また上総の国の松ヶ谷という村に^{ひだ}釈迦堂があり、^{たくみ}飛驒の匠が建てたと言い伝えている。
 - (2) ^{むなふだ}棟札を見ると、四、五百年も経っているようである。
 - (3) 飛驒の匠というのは、一般に飛驒の国から出る大工のことである。
 - (4) この時代には上総の国には大工はいなかった。

(5)飛驒の大工の中には、上京して朝廷の公役を勤める者もあり、国々をめぐる者もあり、行ったさきざきで、仕事を請け負うと、まず材木を^{のこぎり}鋸で挽いておき、それから五里も十里も離れたところへ行き、次々と移動して行って、最初に請け負った建築の材木がよく乾燥したところに、また廻って来て、材木を削って仕上げをしておき、また別のところへ行って、その削った材木のよく乾いたところに、また戻って来る。

(6)だから一カ所の工事に二年も三年もかかるのである。

(7)柱に貫を通す孔を内側がふくらんだ形に^{ぬき}鑿り、貫を少し太く削っておいて、叩いて指し込むから、クサビの必要がない。

(8)年月を経て風雨に当たると、叩き込んだ個所は湿ってふくれるから、柱と貫の間にわずかの隙間もなく、一つの木のようになって、きわめて頑丈である。

(9)飛驒の匠はクサビ一本で締めるというのは、このことである。

3. (1)武家が知行所に居住すれば、万事がこのとおり不自由であるから、人は心を練って工夫をし、何事にも年月をかけ、あらかじめ心がけて仕上げてゆくことになる。

(2)ところが江戸では自由便利であるうえに、せわしく急に間に合わせる風習で、何事もみな当座まかないで事をすましてゆくから、上の者も下の者も損失は積もり積もって、非常に大きくなっているということを知らなければならない。

P.99 ~ 98

[コメント]

江戸時代の思想家、改革家、荻生徂徠(おぎゅうそらい)の名著「政談(せいだん)」。昔の大工、とりわけ飛驒、高山の大工の仕事ぶりを紹介しながら強固な社会のしくみづくりの必要性を説いている。株価が急上昇し日本国中が浮き足立っている今こそ、長期的な観点に立つての戦略的な取り組み、そのための制度設計が何より求められる。

— 2013年5月22日 林 明夫記 —